

FD 通信 No.17

飯田短期大学 FD 委員会

<http://www.iida.ac.jp>

よい研究を探究する 〈 原書読書会を行って 〉

FD 委員長 奥井現理

昨年この紙面で、よい授業にはよい研究が絶対に必要ですと冒頭に書きました。そう書いた張本人であるわたしがそれから何をしてきたかを一部報告したいと思います。わたしが「メイヤロフの会」なる読書会を主宰しているのは別にお知らせしておりです。これはミルトン・メイヤロフの『*On Caring*』を原書で読むものです。翻訳本が出ているだろうにわざわざ原書で読むとは酔狂だなと思ったかもしれませんが、そのような半世紀ほど前の本を読んで何の意味があるのかと疑問に思った方もあったでしょう。あるいは、英会話ならともかく英語が読めることなど何の役に立つのだと思った人もあったかもしれません。主催者はFDの担当者として本学の研究を盛んにしたいと願って一年間運営してきたわけですから、これらは不当な評価だと感じます。なによりこの会に参加して下さっているいわば同志の名誉のためにも、これらには反論をしておきたいと思うのです。その反論を通じて、よい研究なるものがどのようなものであると考えているか、そしてそれがどうして教育の基礎となると考えているのかを示したいと思います。

1. 翻訳は結局は書き換えにすぎず、書き換えられたものである以上、既に著者の書いたものからはずれが生じている

これはタイトルを見ただけで明らかです。原書が『*On Caring*』であるのに対して訳書は『ケアの本質—生きることの意味—』になっています。もちろん訳者や出版社はメイヤロフの意を斟酌してそのような邦題にしたのでしょうけども、メイヤロフが書いたタイトルと大幅に異なっているのは明らかです。これは一事が万事そうで、日本人にはそのままでは理解しにくいであろう構文をどうにか理解しやすいように日本語として自然な構文に変更したり、日本語にはそれに相当する単語がない場合に多くの言葉を使って説明するように変更したりと、翻訳者というものは心を砕いてくれているものです。ですが、それをすればするほど著者が書いたものからは遠ざかります。これは日本人がそれだけを読んで理解しようとするからそれに合わせようという心理が働いたのでしょう。このようにして遠ざかったものが研究に適しているとはいえないのは明白です。かりに松尾芭蕉を英訳でしか読めない米国人から自分は芭蕉の心を理解しているといわれても困るでしょう。ですから、読む研究活動にあっては可能な限り原書で読むべきなのです。

2. 半世紀ちかくもっぱら翻訳が用いられてきたため、そのずれは大きくなっている可能性がある

いわゆる名著にはよくあることなのですが、翻訳が広く読まれるのに原著の読者は大きく増えていくわけではありません。すこし熱心な人でも、翻訳で勉強を進めて、引用の必要がある時だけ原著を参照する程度のことが多くなるでしょう。そういった学習者はしばしば英語でものを読む経験に乏しいですから、該当箇所を発見できても、原文と訳文のずれに気がつきにくいものです。そうして、ずれたままの訳文が論文等で発表されたり、酷い場合にはそれに基づき大学等で教えられたりすることもあるでしょう。それがまた新たな誤解を抱えた読者を生むということが半世紀ほど続くと、ますます世間・業界の理解が原著の内容からずれてゆくこととなります。研究者はそのずれを発見し修正する側でなくてはならないでしょう。

3. 話す英語にシフトしつつある現代において読む英語の教育資源としての重要性は増している

今後、学校教育では読む英語ではなく話す英語の比重が高まっていくでしょう。何らかの事情で海外で日常生活だけを行うという奇特な人には好都合かもしれませんが、ほとんどの人はそうではありません。むしろ、仕事で使う英語は、専門的な読む英語と、あまり上手でない会話スキルで成り立つといってもいいくらいです。もちろん話すのが下手であれば恥をかいったり気まずい思いをすることはあるかもしれませんが、もちろん恥をかかずに済めばよりよいのかもしれません、それより仕事上の専門事項を読んで理解できないことのほうがよほど大問題であるはずですが、読むほうを犠牲にしてでも話すほうをトレーニングしようとするのは、いったい何をねらいとしているのか、英語教育に長年携わっているわたしではあるのですが、よくわかりません。ともあれ少なくとも研究者が軽率に時流に阿らず、読む英語の教育資源を守っておくべきなのは明らかでしょう。なお会話練習を減らせとか会話練習から得るものは何もないとは言っているわけではありません。

目次

よい研究を探究する 〈原書読書会を行って〉
<FD 研修会> 評価を知り指導に生かす
<コラム:FD の意義>

FD 委員長 奥井現理	ページ 1
FD 委員長 奥井現理	ページ 2
教務委員長 奥井現理	ページ 3

<FD 研修会> ～評価を知り指導に生かす～

2025年3月25日、FD研修会が行われました。飯田高等学校の小林洋一先生を講師にお招きして、高校と大学とを評価で接続させる、あるいは接続を円滑にすることができないかと試みる、そんないわば高大連携の具体的な取り組みとなりました。同様の取り組みが行われたという話はいずれ聞いたことがありません。もし同様の取り組みがあったことをご存じの方があれば、本学にご一報ください。



本研修では、小林先生に委員長の奥井が質問してお答えいただく形式で前半が行われました。「指導と評価の一体化」「観点別学習状況の評価」「主体的に学習に取り組む態度と評定値」「個人内評価」といった事項を、小林先生はスクリーンや配布資料を用いて、高校での評価実践の様子やその考え方を教えてくださいながらご説明されました。文部科学省の資料はもちろん誰でもWEBで閲覧可能なのですが、なにしろ量が膨大ですし、用語も大学の教員にはなじみの薄いものですから、なかなか自分たちが必要事項を発見し理解して読み込むということは簡単にできるものではありません。ましてや、高校での評価実践のことは訊こうと思って気軽に訊けるものでは決してありません。ですから、小林先生からの教えは、本学にとってこれ以上なく得難いものであったのです。



後半は、グループ学習が行われました。高校から寄せていただいた評価（仮のもの）を、大学側としてどのように受け止めて、入学後の指導に生かすべきかを、グループで話し合い、発表を行うという活動です。小林先生のご指導で、本学内の各学科専攻部署の混成グループが構成され、さまざまな立場からさまざまな意見を寄せ合いました。そして、このような人物であると受け止め、このような教育を行うべきだと考える、と各グループが発表し、それを小林先生にお聞きいただき、ご講評をいただきました。

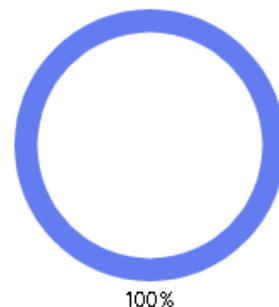
後日、多くの参加者から、新しい気づきが得られたという感想が寄せられました（下部円グラフ参照、時期の関係で、集計途中のものになります）。コメントも、高校の評価や指導を大学で引き継ぎ、人を育てていくという視点をもつことができたという趣旨のものが多く寄せられました。

従来、研修会と講演会とが一年に一度、交互に行われてきたFD研修ですが、ここ三年ほどは講演会を行わず、研修会を開催しています。今回は小林先生をお招きすることができたので、講演会の意味合いも少しだけ取り入れたことになるのかもしれませんが、自分たちが自分事として学ぶ機会を作るという基本方針は変わっておりません。これを自分たちの手作りで和やかで有意義なものになるよう企画運営することにFD委員会が全員で取り組みました。

文末にはなりましたが、お忙しい中このような貴重な学びを本学にお与えくださいました小林洋一先生に、厚く御礼申し上げます（文責 奥井現理）

1. 2025年3月25日に行われたFD研修会「評価を知り指導に生かす」では得るものがありましたか

● あった	19
● なかった	0
● どちらともいえない	0



<コラム：FDの意義>

善い授業、悪い授業というものはあるのか。FD活動の意義は何であるのか。

教務委員長 奥井現理

FDとはファカルティ・デベロップメント、つまり学部なり学科なりを発展させるという意味なのでしょうけども、もっぱら授業をよくする活動のこののみを意味している言葉として用いられています。授業をよくすることも授業改「善」などと呼ばれ、まるでそれが道徳的によいことであるかのように扱われている現状には、わたしは非常に歯がゆい思いを持っています。それは裏を返せば授業が下手であることは道徳的に悪であるという思想がまるでスタンダードであるかのような状況になりかねないからです。そして、安易なアンケートの実施や授業評価はその傾向を推進することに加担する可能性すらあると考えています。

わたし自身は、下手な授業（と思われる授業）に参加することがもちろん楽しいわけではありません。学生時代はそうした授業に不機嫌に参加したりしなかったりと、ろくに内容を理解しようとすることなく不遜で不真面目極まりない態度で大学の一年生二年生の期間を過ごしました。そんな90年代にはそれほど珍しくなかったタイプの学生であったわたしですが、三年生になり院生になりと長い間大学にとどまり続けるうちに、心境の変化が生じてきたことに気がつきました。それまで下手だとはいわないまでも退屈ではあった、そしてわたしにとって不愉快であったタイプの授業が面白いと感じるようになり、そういったタイプの授業にこそ充実や自らの成長を感じるようになったのです。授業のほうが変わったのではなく、それを受けているわたし自身が変わったのです。そのタイプの授業とは、100年も200年も昔の原書をどこまでもひたすら細かく細かく読んでいくというものです。グループワークもディスカッションもありません。たいてい、毎回一人の学生が担当し、一文ずつ原文で読んで日本語に訳していきます。学部生などは一回にだいたい半ページも進めればいほうでしょう。もちろん内容は何をやっているのかちんぷんかんぷんで何の意義も感じられず、うまくその場を切り抜けることだけを考えていたわたしは、自分が担当となる時期と箇所を予想し、何週間もかけてそれこそすべての単語を辞書で引き、語意をつなぎ合わせて日本語らしく整形し足りないところは想像力と帳尻合わせの能力を最大限に発揮して補うなど、学問をする上では最も無駄で有害な才能を躊躇なく活用するという不誠実極まりない態度で臨んでいました。そんな心掛けでは当然のことですが、当時のわたしにとっては自分が担当でない回などなんの意味もありませんから、退屈を隠しもしない態度でただただ座っていたか、出席さえしないこともしばしばだったのです。さて自分の担当回になり、だいたいの中していた予想範囲を読み始めます。当然ですが、初手から院生たちの冷たい視線がわたしに突き刺さり、「それ違う」という指摘が飛びます。うるさいな黙っているよと当時のわたしは思うのですから大胆不敵とはこのことです。先生は何も言いませんが呆れ顔です。本人は、いったいなんだというんだ、いままで担当してきた学生たちと同じことをやっているんだぞと本気で思っているのですから救いようがありません。当然に、数行も進むことができずに散々な90分がただ過ぎていきました。わたしの満足感は最低で、授業アンケートがその当時にあれば、わたしは気まずい目に遭わされた憂さを晴らすためにいろいろと書きなぐっていたかもしれません。

さて、若き日のわたしが酷い目に遭わされたその授業は、下手だったのでしょうか。どこかが悪かったのでしょうか。グループ活動やディスカッションがあればわたしは気晴らしができたからそっこのほうが上手な授業で、善いものだったのでしょうか。わたしが気まずさや不満を感じないように工夫や配慮を凝らした授業が善い授業なのでしょうか。もちろんそうではありません。悪いのはわたしの心掛けでした。幼稚で不遜でプライドだけは一丁前だったわたしが鼻柱を折られたというだけのことなのです。むしろいらぬ鼻柱を折っていただいたのだから感謝しないといけないと今になって思うくらいです。ここからの経過は省略しますが、こうした授業の意味と価値に気がつき、自分が担当であるかないかなど無関係に入念に準備を行い、毎回の授業に惜しむように参加するようになるまでには、まだしばらく時間がかかりました。その授業の目的がわたしの幼稚なプライドを温存・助長することではないのは当然のこと、目的は学生たちの能力を向上させる方向にあったのですが、自己中心的なわたしは愚かにも初期のうちにはそれに気がつかなかったのです。その能力向上へのしくみが理解できない、一回や二回で効果が実感できないからといって、ある授業をよいとか悪いとか判断することは謙虚さに欠けているというしかないでしょう。いうまでもありませんが、その授業が悪い授業から善い授業に変わったわけではありません。わたしがその価値に気づいて能力を大いに向上させることができたからと言って善いわけでもありません。ただ、そういう授業

だったというしかないのです。そしてわたしは、そういう授業にこの上ない人生の恩義を感じているというわけです。

現時点で、(道徳的に価値が高いという意味で) 善い授業というものは普通の意味では存在しないとわたしは考えています。もちろん多くの学生の能力を向上させるに都合よくしつらえられた授業というものはあるでしょうし、それをできる人を名人と呼ぶのでしょ。ですが名人であることと聖人であることは別のことです。また逆に、学生の能力を向上させることのできない授業というものもあるでしょう。それは下手な授業かもしれませんが、道徳的に悪いということではありません。こうした授業の巧拙を知る手掛かりとして授業アンケートは役立つものと思われま(かりに、ただただ学生を傷つけ自分の悪趣味な個人的満足を得ようとするを秘めた目的として行われている授業や、人類殲滅などの目論見をもって大量破壊兵器の開発やテロルの実践等を引き起こそうとしている授業というようなものがあれば、それは悪い授業といえそうです。また逆に人類救済の目的をもつ授業なら善い授業と呼ぶかもしれませんが、それらを授業と呼んでよいのか否かは別としてですが、もちろんそのような授業をしようという人間がなぜ教育の世界に入るのか不思議ですから、そういった授業はあったとしてもごく数少ないものでしょう。もちろんそうした意味での悪い授業が起こってしまうことを学校は組織として予防しなければなりませんし、予防してもなお起こってしまったのなら排除・解決しなければなりませんから、その意味でも組織として行う授業アンケートはおおいに役立つものとなりえるでしょう。もちろん、かりにそうした授業があればアンケートなど待たずにすぐ学校運営側に知らせてほしいもの(ではあるのです)。

さて、こうした状況にあつて、FD 活動とはどのような意義を持つと考えるべきでしょうか。アンケートでの「支持率」などという美意識に欠ける言葉がわたしの前職である予備校講師時代にはあつて(今もあるのかはわかりません)、それにより講師としての身分や待遇が大いに变化させられることを痛感して酸いも甘いもやりきれない思いをしてきた身ですから、アンケートの結果が「支持率」的によかった悪かったというふうには教員の皆さんに感じてほしくないのです。授業アンケートは、授業の巧拙に関してとは別に、どのようなタイプの授業を行っていききたいのか、教師としてどのように生きたいのか、それを考えるツールだと思つてほしいと願つています。考えたうえでなら半期での「支持率」向上を目指すのも結構でしょうし、半期での「支持率」など意に介さず何年も経つてからその価値に気づく学生もいるだろうくらいの心持ちでいるのも結構でしょう。そのうえで、FD 研修や授業見学等を、技術や心構え、教育への理解を高めたり深めたりするために利用してほしいと思つています。こうした環境にあつて、いずれ来る教育目的や教育目標、AP/CP/DP の見直し時に、それこそファカルティをデベロップメントさせるための新しい組織の方向が見えてくる、FD 活動にはそのような意義があつてほしいと願うのです。

大学改革というものがいったいいつごろから行われてきたのか定かにはわかりませんが、現代の改革の源流は 90 年代末期頃にほの見えてきたようにわたしは感じています。かつて、聞いたこともなかったオープンキャンパスという言葉を目にするようになり、全く行われていなかった授業アンケートが行われるようになり授業回数が厳密に管理されるようになり……それが 90 年代末期から 2000 年代初期にかけてのことでした。授業改「善」の名のもとに、それ以前から行われていたような、研究の蓄積を背景に圧倒的な知識量と経験、知見を、伝統的で確立された演習の方式と論文指導を通して伝授してゆくというスタイルの大学教育(もちろんほかにもたくさんやり方は存在していたのでしょけれども、わたしはそれをほとんど経験していません)は時代遅れで排すべしという扱いを受ける日がもうすぐそこまで、あるいはすでに来ているのかもしれない。しかしかりにも「善」を称するのであれば、その価値は道徳的で普遍的なものとして想定されていなくてはならないはずで。それならばなおさら、過去のもの切り捨てるべしなどという粗雑なことをわたしたちが疑念なく推進していいはずがないことは明らかです。変わつているのは人間の側であつて価値のほうではありません。人間を普遍的な価値に向けて変えてゆくのが教育の使命であるということに賛同できる人ならば、「価値観」「多様化」などといった言葉をより慎重に使うよう心掛けるべきだということにもご賛同いただけることでしょう。

編集後記

FD 通信 17 号をお届けします。全科目授業アンケート、FD 研修会等、前年度までの活動を引き継いで行つてきた様子と、今後どのような方針で活動が行われようとしているかを検討している様子が本紙面でお届けできていれば幸いです。なお、<キャンパスライフに対する学生満足度アンケート実施結果>は今号は休載(後日号外として刊行予定)させていただきます。(編集担当: 奥井現理)

飯田短期大学 FD 通信 No. 17 (発行日 2025 年 3 月 31 日)

FD 委員会 委員長 奥井現理

委員 桑原真裕子 橋爪智恵子 菱田博之 壬生江美 遠山清香 細田裕子